

日伊女性国際会議「女性と社会」

東京で開催された日伊女性国際会議「女性と社会——日本とイタリア」に参加できて嬉しく思います。女性と社会のかかわり、仕事と家庭の両立といったことは、時代が変わっても、女性にとって大きなテーマです。

私は半世紀にわたり、ファッションという“人間のからだに一番近い文化”を携えて、世界を歩いてきました。とりわけ「日本の女」ということを自分のアイデンティティとし、仕事をつづけてきました。そんな長年の活動の中から、家庭や仕事、日本と世界などについて、感じたこと、体験したことをお話しさせていただきます。

1. 家族を持ち、仕事をする

私がこの仕事を始めたのは、結婚してからのことです。実は大学を卒業してすぐに結婚しました。当初、もちろんグッドワイフになろうと毎日お料理をつくったりしていましたが、そんな日々を過ごしているうちに、家事に10本の指はいらないうようになり、軽い気持ちでデザインの学校へ通い始めました。

基本をならっているうちは、あまり興味もわかかなかったのですが、だんだん形ができるようになると面白くなってきました。やがて、この道へ。1951年、ちょうど日本映画の全盛期で、私の作品が映画関係者の目にふれ、映画衣裳の仕事に追われることになりました。映画製作の現場で人間について学んだことは、どんな学校での勉強より身についたと思います。ここが私のキャリアのスタートでした。

それ以来、早いもので半世紀を駆けてきたことになります。これほど長い間、仕事をつづけてこられた理由を尋ねられることがあります。あるいは、長く仕事をつづけるポイントは何ですか？と。答えは明快です。

まず、自分の好きなことを職業に選ぶことができたこと。私は幼い頃はアーティストになりたかったくらい、ものを創ることが好きでした。だから、デザイナーというこの仕事で忙しくしていても、疲れることもなく、時代を先どりしながら、走ってこられたのだと思います。好奇心を持ち続けられる対象であること……これは長くつづける上で大切なことでした。

さらに、仕事をする女性にとって、ファミリーの存在があげられます。何よりパートナ

一の協力が得られることは重要です。

私の場合は、あるときから夫が私の仕事の経営面をみてくれるようになり、私はデザイン活動に専念。お互いに持ちつ持たれつ、車の両輪という感じで走ってきました。二人の子供が小さい頃、今では珍しくない光景かもしれませんが、夫が学校参観に行ってくれたこともありました。「男は僕だけだった」と言って帰ったものでしたが、彼が全面的に協力してくれたことは、ありがたかったと思います。

私にとって家庭は、鳥が帰る巣のようなところ。その日一日の出来事をそれぞれにおしゃべりし、一緒に喜んだり腹を立てたり……リフレッシュしてまた明日を迎える。育児には人の手もかりましたが、日頃ゆっくり会えない分、私たち夫婦は休日には仕事を入れないことを原則とし、子供たちも友達と約束をしないようにして、家族で過ごす時間を確保したものです。

家庭があるから落ち着いて仕事ができたとというのが、私の実感です。逆にファミリーという支えがなかったら、長い年月やってこられたかどうか……。

2. 日本の文化、ものづくりのテーマ

1960年代に入り日本の映画が斜陽になった頃、私は海外に目を向けました。1961年1月、初めてパリへ旅をしました。同じ年の夏にはニューヨークへ——。二つの都市への旅は、世界でデザイナーとして仕事をする事への意識を呼び起こしました。

パリではシャネルで、私のまっすぐな黒髪を「美しい！」とほめられ、他との「違い」が実は大切な個性であることを認識しました。

ニューヨークでは、日本製品はデパートの地階で売られていました。質が悪くて安いものでした。また現地で観たオペラ「マダムバタフライ」では、蝶々夫人が哀れな日本の女として描かれていました。日本の女はこんなんじゃない！日本人の手でつくった私のデザインしたドレスを高級品の売り場に並べてみせる！と心に決めたのです。

それから世界に通用する日本独特のもの、日本の文化について改めて勉強しました。1965年、海外で初めてのショーをニューヨークで。そのショーは「East meets West」とマスコミで評され、新しいもの、珍しいものが大好きなニューヨークで受け入れられ、10年間ニューヨークを中心に活動しました。そして1977年にパリ・オートクチュール組合の会員に認められ、27年間にわたってパリで作品づくりをつづけました。

私は西洋の歴史の中で育った洋服を職業にしました。それだけに海外に出るとき、私は自分のアイデンティティを「日本の女」ということにすえ、独自性を打ち出したのです。そして、日本の伝統や感覚を生かしたデザイン、“東と西の融合”を一貫した作品づくりのテーマとしてきました。

日本は西洋に対して異文化の国、独特の文化を持っています。自然と共生する生活スタイル、紙と木の文化が日本の伝統的な美意識を作りあげてきました。衣服の伝統もずいぶん異なります。西洋の衣服がからだのラインを強調するのに対し、着物はからだに巻きつけて着ます。形は大体同じで、柄や着方によって年齢や職業、男女の差を表し、“季節を着る”のも着物の大きな特徴です。着物に代表されるこの季節感は、世界に誇れる日本の美意識のひとつだと思います。

3. 現在、そして、これからの女と男

私が仕事を始めた1950年代は、日本では女性が仕事をするのがまだ珍しい時代でした。“職業婦人”と呼ばれて特別な目で見られたものですが、今では仕事を持たない女性のほうが珍しいくらいの時代になりました。

そんな現代社会でも、女にとって仕事をしながら子供を産み育てることは大変なこと。どれだけ男性が手伝ってくれるといっても、やはり負担は女性にかかります。日本では少子化が大きな問題で対策が議論されていますが、女性の負担を少しでも減らせるよう国もしっかり応援してほしいと思います。

女が男と同じ競争社会の中で頑張るようになって、様々な分野で生き生きした姿を見るのはうれしいのですが、半面、やさしい女らしさが失われているのではないかと少し心配です。それに強い女が増えたせいか、男が弱くみえるのも残念です。男と女は、違いを尊重できるパートナーでありたいもの。そして、女性たちには仕事も家庭も育児も、楽しみながら欲張ってほしいと願っています。

(要旨)

私は半世紀にわたり、ファッションという国境のない世界で仕事をしてきました。長く仕事をつづけてこられたのは、ものを創ることが好きだったこと、そして何よりパートナーの協力があったからだと思います。

近年、女が男と同じ競争社会の中で頑張るようになって、様々な分野で生き生きした姿を見るのはうれしいことです。でも、半面、やさしい女らしさが失われているのではないかと少し気がかりです。強い女が増えたせいか、男が弱くみえるのは残念。男と女は、違いを尊重できるパートナーでありたいものです。

“女性と社会のかかわり”“仕事と家庭の両立”といったことは、時代が変わっても、女にとって大きなテーマですが、仕事も家庭も育児も、楽しみながら欲張ってほしいと願っています。

森 英恵 (デザイナー)